



ベッドの高さ、車いすの位置、ボードの使い方などスタッフ同士で確認しています

③「スライディングボード・スライディングシート」
立ち上がることは難しいけれど座位は保てる方へ、ベッドと車いす間の乗降時に用いることで、介助の負担を軽減することができます。

下げることが可能なベッドを取り入れています。
ほぼ家庭の布団と変わらない高さで、ひとりでも安心して身体を動かせる低床ベッドなら、自分のペースでストレスのかからない姿勢で過ごして頂けます。
またベッドは通常の高さまで上げることも出来ますので、用途に合わせた対応が可能です。



④「介護リフト」
立ち上がることや座位を保つ

が出来ます。
ボード上を滑らせながら乗降する訳ですが、その際には、車いすの位置やベッドの高さ、ボードの使い方等のポイントを確認しながら行います。
各々の残っている機能を生かして自分で出来ることは協力して頂きながら、より安全にケアを提供するために、スタッフ間で日々手順を確認しながら行っています。



ことが難しく、体躯が大きな方の乗降には、これまでスタッフが二人で対応していました。現在は介護リフトを積極的に活用するようにしています。
正しく用いることで入居者様にとってはより安全に、そしてスタッフにとっては日々のケアへの身体的負担を軽減することで、腰痛や腱鞘炎の予防やそれが原因による離職を防ぐことにもなります。

〔福祉機器を活用する意義〕
福祉機器は適切に使用することで入居者様にとっては、日常生活上のハンディを補い、自己の尊厳を保った自立した生活を送ることが出来ます。
同時にスタッフにとっては、体調不良や看取り期を含めて、科学的な根拠にもとづいたケアの質を向上させることが出来ます。また、自身の身体を守るための介護負担の軽減や業務の効率化につながります。
現在介護分野では、人材確保の一環として積極的な福祉機器やロボットの活用が促進されており、それに伴って新しい機器も次々に開発されています。
しかしどんな機器でもただ導入するだけでは十分な効果は得られません。
「使用することによってどんなメリットがあるのか」「扱いにはどんな点に注意が必要か」等、導入前や導入後もスタッフ間でコミュニケーションを十分にとり、情報を共有し、実践を通じて何度も確認しながら正しく理解してもらおうことが大切だと考えています。

知ってほしい私たちの取り組み

特別養護老人ホーム大名
『新施設での福祉機器活用による業務改善』

施設サービス課 副課長
(理学療法士) 伊波 成 恭

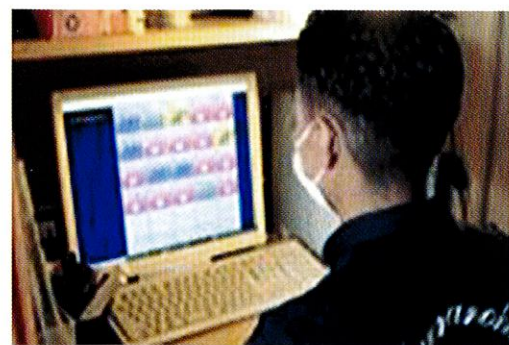


大名では令和4年8月に地上3階建、全室個室のユニット床(100床)の新施設が完成しました。

新施設では、それまでも取り組んできた「ユニットケア」をより本格的に実践しています。「ユニットケア」とは、集団で生活する施設であっても、プライバシーに配慮しつつ、少しでも家庭に近い環境を整えて、入居者様一人ひとりの個性や生活リズムに応じた暮らしができるようにサポートすることです。
今回はその中でも、施設としての機能を生かした福祉機器を活用することで、入居者様にとって安全で安心していただける環境を提供すると共に、介護スタッフにとつての負担軽減や業務の効率化にもつながる取り組みについて、幾つかご紹介いたします。

①「眠りスキャン」

マットレスの下にセンサーを設置することで、ベッド上での体動(寝返り、呼吸数、心拍数)を検出し、スタッフがパソコン上で「睡眠・覚醒・離床」を確認できる機器です。
いつ起きて、寝ているのか(レム睡眠・ノンレム睡眠)をほぼ



右上) マットレス下のセンサー
中) ベッド脇の通信用ユニット

正確に感知できるため、スタッフは入居者様のプライバシーや睡眠を妨げずに訪室することが出来ます。
また荷重センサーによつて、離床行動(起き上がり・端座位・離床)を検知してスタッフの携帯す

る通信端末機に通知できるため、入居者様からのコールがなくても、スタッフが適切なタイミングで見守りや必要なケアを提供することで、転倒やベッド上からの転落を未然に防ぐ事にもつながります。
また、一定期間の睡眠時間を自動で記録して検証することで、その方の睡眠のリズムを客観的に把握して、昼夜の生活リズムを整えるケアへ活用することができます。

②「超低床フロアベッド」



低床ベッドの上で寛ぎながらTVを鑑賞して過ごされています

入居者様個々の状況に応じて通常よりも低い位置まで電動で